

コメント三

フロア発言のための覚書

渡辺 美季

いま、過分なご紹介にあずかりました渡辺と申します。名前からも分かりますように沖縄出身ではないのですが、ちよっとしたきっかけから琉球史の研究の道に入りまして、いまに至っている次第です。

私は、例えば甲子園では、一応まずは沖縄の高校を応援するのですけれども、沖縄が負けると今度は鹿児島の高校を応援するのですね。先ほど、(琉球を攻めた)薩摩になんとなく反発心を感じてしまうというようなお話をされた先生もおられましたけれど、私は自分自身はあまりそういうこだわりは持っていません。むしろ琉球史を学ぶ中で、薩摩についても勉強する内に、日本の中でも琉球という地域と深く関わり、かつ個性的な歴史を紡いでいる薩摩という地域にも関心を持つようになりまして、琉球も薩摩もどちらも非常に惹かれる対象として考察している。現在の私のパーソナリティーは、そういうところにあります。

そんな私から見ますと、島津の琉球侵攻四〇〇年と言うことで、今年は各地で色々な催しが行われているのですけれども、これについて少々気になる部分があります。それは研究の世界とはちよっと違う、一般的な(侵攻の)語られ方のなかに、どうしても薩摩の琉球侵攻、薩摩の琉球支配、あるいは征服とか従属とか、非常にネガティブな言葉がたくさん出てくることなんです。その一つ一つを取っていつて、事実かそうではないかということを議論したりするということではないのですけれども、何か少し、偏りを感じるといふか、一般的な捉えられ方の中には、近代の植民地論とか、我々が現在なじんでいるところの主権国家的な考え方に、当時の国家の在り方を当てはめてイメーajしている部分が多々あるのではないかと感じingのです。

ですけれども、当時の東アジアの国、あるいは国と国との関係の在り方は、当然のことながら今とはまったく違

ます。例えば、国には大・小がありました。そして当時は、「大」きな国が「小」きな国に従うことは悪いことだといったような考え方は無いわけですね。

それからまた薩摩も、ある意味で独立した存在ではありませんでした。統一政権―秀吉、そして家康―と琉球との間の仲介者として、あるいは統一政権と琉球の間でダブルバインダーとして振る舞わなければいけない存在、そのような定めに置かれていた存在だったわけです。島津の侵攻を考える場合、そういう薩摩の「やむをえなさ」も、もつとクローズアップしても良いのではないかと思ったりもするわけです。

ですので、私は、「琉球と薩摩」あるいは「琉球と日本」という関係性・枠組みに気を取られ過ぎず、ぐうっとレンズを後ろに持っていくまして、東アジアの実態を俯瞰するような形でこの侵攻という事件を見ていくことの重要性を、むしろいま改めて指摘したいと感じております。もちろん、ここにおられる先生方は、まさにそういうことをずっとおっしゃってこられたのであって、何も私がいま初めてここで新たに指摘することでは全くないのですけれども、本日のご報告は日本の動きに関わるものが多かったように思いますので、私の方では専門が東洋史ということもあり、中国の方に少し引き付けて発言していきたいと思えます。

（ここから）あとはレジュメに沿って思い付いたことをぼんぼんお話ししていくという形にしたいと思います。レジュメに書いてあることは、もちろん全て私のオリジナルというわけではありません。どなたの意見であるかということは、話の中では時間の関係で割愛しますけれども、注に挙げてございますので、その点はご了承いただければと思います。

まず（一）に、琉球侵攻と日明関係という風に挙げました。改めて確認しておきたいのですけれども、島津氏の琉球侵攻、琉球出兵の最大の目的は、琉球を全面的に支配することではなかったんですね。ではなぜ、これが行われたかというと、その一番の大もとは、やはり幕府が日明貿易をしたいと、幕府と明との国家間による貿易をおこないたという要望を持って、これを琉球に仲介させようとしていたことにあります。明との関係を長く保っている琉球に、これを仲介してほしいと思ったわけです。なぜ日本と明の、国家間の貿易でなくてはいけなかったのか。なぜ民間の船で適当に貿易をするということでは駄目だったかということも含めて、この問題は琉球侵攻を考える際に、非常に重要な問題であると思うのです。そのように考えますと、琉球侵攻は日明関係の問題であるとも言えます。そして、それは日本あるいは薩摩・幕府に対して、琉球が

従うのだとか、あるいは背くのだとかいうような問題では、なかなか語れないものであるということにもなります。そういう前提で考えていくと、やはり琉球の意志がどこにあるのかということが、次に重要な問題になってくるわけです。

そこで最初に琉球が、明に対して島津に侵攻されたということを報告した時に、どういう風に伝えたかという部分を見ていきますと、先ほど上原先生のご報告でもご紹介がありましたけれども、大体（事実通りに）正しく、どういう経緯で攻められたかということを説明しています。ですから、これも重要な点として、まず（侵攻の）被害を非常に少なく報告しています。それから侵攻は一過性のものであるということを強調しています。そして倭国は、見かけは勇猛なのだけれど中身は慈悲深いと言って、今後、その倭国と和議を結べば、琉球と日本は共存していけるのだということを（明に）説いています。さらに自分がこれまで続けてきた明との関係も、非常に重要なものであるから、これを継続したいということも主張しているんですね。そしてさらに薩摩が台湾出兵のための援軍を出すように要請をしたのだけれど、それは自分は明の臣下であるから断ったということも伝えていきます。

これはどういふことかと言いますと、これからいまま

で通り（琉球と）明との関係も続けていきたい、それから日本との関係も始めるつもりだ、そして琉球が日本と関係を持つということは明にとってもメリットがある——日本の台湾侵略を琉球が抑制できるのだ——と、主張しているんですね。つまり琉球は侵攻を受けた直後から、一貫して、日本と明の間で国家を存続させていく道を模索しているわけです。日本が明かではなくて、二国の間でやっていくのだという姿勢を明確に出しているんですね。この琉球の意志と、それに基づく戦略が展開されたこと、恐らくこれこそが、侵攻の後にも琉球が、日本と中国の間で一王国としての立場を維持することができた最大の要因であったのではないのでしょうか。

もちろんそれだけではなくて、幕府・薩摩は何よりも明と貿易をしたいわけですから、完全に琉明関係に踏み込んでいくことができないということもあります。それから一方で、明の方も日本が非常に怖くて、なんとか琉球を自分のほうにキープしておきたいと考えていたことも重要です。朝鮮を攻められて、琉球を攻められて、実はこのあと台湾にも出兵しますので、じわじわと自分の属国を侵略されている。そういった中で日本に対して自分たちが持ちこたえられるかどうか、あるいは東アジアの優位性を（明・日の）どちらが維持できるか。そのバロメーターとして琉

球が意識されていたという状況があったわけですが。

このような二国の思惑があつて、そこに先に申し上げたような琉球の意志が働いたわけです。こうして琉球は、明と日本、どちらにも包摂されない位置を確立していく。琉球はただ運命に翻弄されていたわけではなく、三者の意志が絡み合った結果、そういう状況になつていったんだというのを、まず一つ目として指摘したいと思います。

次に（二）の「東アジアの国際秩序と君臣関係」というところに行きます。日本と明の間に位置を獲得して、国家存続を図った琉球なのですけれど、それでは、どちらに「より」寄つていたのかということ、どういう風に考えれば良いのでしょうか。

豊見山先生は、この非常に難しい問題について、喪に服す日数という客観的な数字を出すことで琉球の「従属度」を測つてみようという試みを、本日はさつたわけです。これはこれで非常に興味深いチャレンジだと思うのですけれども、やはり、それをもつてしても、従属度というものは最終的に測れるんだろうかという疑問が、私の中では大きいんですね。

それはどうということかという、君臣関係の在り方は、そもそも中国と琉球、日本と琉球では違うわけです。臣下に求めるものも違うのです。求めるものが違う場合の規制

力というものを、はたして測っていくことができるのかということですね。

少しはしりますが、簡単に言いますと、中国の方は、（薩摩と比べ琉球に）規制してくるものはかなり少ない。とはいへる一定の要求はしています。そして琉球は、この中国の求める臣下の役目―少ない要求ではありますが―をほぼ完全に果たしています。ところが薩摩の求めてくる臣下の役目―中国と比べたらクリヤーすべき事項が非常に多いのですが―を琉球が完全に果たしていたかと言いますと、これは実は様々な意味で欠陥が多かったのではないかと思います。

これについて実例を一つ挙げたいと思います。レジュメ三ページの「幕府と清朝の国際秩序の通用力」の（B）のところを見て下さい。この話は豊見山先生がご論文で明らかにされたことでありますが、琉球に漂着した中国人について、もともと幕藩制の決まりに従つて日本の長崎に全部転送していたんですね。ところがある時期に中国が「中国人の漂着民を保護・送還するように」という命令を琉球に下してきまして、それを受けて琉球は直ちに、長崎ではなく、直接、自分たちの朝貢ルートを利用して中国に送り返すという決定をして、薩摩や幕府に相談せずに、中国に返事をしてしまいます。この時、もう薩摩・幕府はこれを

追認するしかなかったんですね。

これが何を意味しているかと言いますと、日本の規制力というものを、中華帝国―清朝―の持っているそれと並べて、二つとも東アジアにぼんと投げ出して比べてみると、やはり清朝のほうが圧倒的に強いのです。ですから琉球は、普段は様々な薩摩あるいは幕府の要請に従っているけれども、ごくたまにそれと違うような清朝からの要請があれば、日本の規制は置き去りにして、そちらに従ってしまう、そしてそれに対して日本側はなにもできない……とそういう状況があったわけです。こうした状況の中で「従属度」、琉球が日本と中国のどちらに「より」寄っているのかということを論じていくのは非常に難しいことなのではないかと、私はその点をやはり指摘しておきたいと思うわけです。

そのことを念頭に置きまして、そのもとで二つの国の間の琉球ということをやより考えてみたいと思います。では(三)の「語られる侵攻」と琉球の自意識および儒教思想に移ります。ここでは琉球の側で島津の琉球侵攻がどのように語られてきたのかということを、ちょっとピックアップしてみます。

一八世紀中葉に琉球政府が編纂した正史『球陽』に、島津侵攻を受けたあとに、国王尚寧が薩摩に連行されて、二年後に帰国してくるシーンが次のように描かれています。

「琉球侵攻後に連行された」国王が薩摩に滞留してすでに二年が過ぎた。王は「私は中国に仕えている。従って「中国の」臣下の義務として薩摩での滞留は終えるべきである」と述べた。太守公（薩摩藩主・島津家久）は深くその「中国への」忠義を褒め、ついに国王は釈放されて帰還した。そこで王国はふたたび平和と安穩を得た。

ここでは侵攻による国王の連行という、非常に国辱的な事態が、薩摩藩主が褒めたたえるほどの、国王の中国に対する忠誠物語へと転換されてしまっているんですね。この「転換」を指摘して、琉球人の描いた国家像はどういうものであったかということを議論した、グレゴリー・スミッツさんというアメリカの研究者は、これを「日本との抑圧・被抑圧関係」を「儒教的道徳権威の関係」へと置き換えるレトリックを用いて、「琉球国王の地位」を薩摩藩主と同等―あるいはそれ以上―にまで引き上げようとする政府の戦略(strategy)であると指摘しています。時間の関係で読み上げませんけれども、もう一つ、侵攻の際に日本人でありながら琉球王の家臣として島津軍と戦った、山崎二休という人物に関する、『球陽』の記述にも、同じようなレトリックが利用されています。

このように精神的な文脈の中で、日本に対して匹敵しよ

うとする、あるいは日本を凌駕しようとする意識が、近世（※一六〇九年～一八七九年）の琉球には見られます。この対抗心のようなものは、少なくとも私が見た範囲で、中国に対してはありません。従って、この日本への精神的な匹敵あるいは凌駕への志向性、それこそが薩摩の琉球侵攻の消せない傷跡なのかなという気がします。つまり、中国とは自発的に結んだ君臣関係、日本とは強制的に結ばされた君臣関係、その差異が、近世における琉球の自意識の中に滲み出ているようなそんな気がしてならないわけです。そのあたりのところから近世琉球の二つの君臣関係の比較や、その中における琉球侵攻の意味の捉え直しを行っていくことができないものだろうか…と、いま私はそんなことを考えております。

とりとめのない発言になってしまつて申しわけありませんが、こんなところで。ありがとうございます。

（東京大学大学院人文社会科学系研究科東洋史学講座・助教）

荒野 どうもありがとうございます。このあとの議論の方向性について整理してもらった、そういう発言がいただけたのではないかと思います。

時間が押していますので、次は目黒将士さんにご発言いただきます。再三、参加のみなさんからご紹介がありました、この事件を現代に語り伝えた『薩琉軍記』について、精力的に写本を収集し、研究して来られた目黒さん、書誌学的なお話をしていただけたと思います。写真等を使いながら、小峰さんが語り残されたことについて、もう少し細かい実態のお話もしていただけたと思います。それでは、よろしく願います。